

もいひいでぬべきこゝちす。」とて母上の、よろこばせたまひしことありき。さればわれらのごとく、父母の許をはなれて、遠きに在る身には、寫眞こそ孝のたすけをばすれ。と思ふに、いよく、そのたふとさのまさりてなん。さてまた去年のくれ、姉上安らかに女子をあげたまひぬ。おのれにははじめての姪なれば、どびたつばかりのうれしさ何にかたとへん。春子となづけつ、なごさくにつけ、

あはれつばさあらんには、一かけり春子のかほを、なごねがふもせんかたなし。さるをある日の朝なりき。一聲高く郵便と投げいれたるものあり。たれのふみぞと見るに、あなうれし。春子の寫眞なりけり。そのをりのうれしさ、拙筆のつくすべくもあらざりき。これこそ我姪よ。と思ふに、はなちもやらず。其後もこの寫眞は、常に机

上にありて、われをなぐさめぬ。ふみよみて儂みつるをりも、これを見れば、こゝちははやぐぞあやしき。あはれこのうれしさも、世に寫眞といふものあればこそとたふとし。けふしも、青森なる友の許より、寫眞しつればちがくに送らん。といひおこせたるに、待遠におぼゆるあまひ、かくはこのものゝうれしさをものしつ。

春の野邊

さくら

雪か^{ゆき}とまかふ盛のさくら

一ひら二ひら散り來る野邊に

萌え出る若草また柔かく

色わざやかに花咲きみてり

櫻の木かけに若草しさて

はらから二人花つみ遊ふ

姉よこの花何はなゝると

その花知らすやそは莖はな

うつくしき色おもしろきすがた

いともめてたくいともうるはし

紫にはふこのすみれ花

來れ姉よ蓮華を摘まん

れんげを摘みて花束とせん

否や弟その花のへに

眠る小てふの夢驚かん

小川の流れ水ゆるやかに

蓮華にすみれ花咲き亂れ

織りなす錦を蓐となして

はらから遊ぶこの春の野邊

故郷の春

すみれ

雲どもまかふ櫻はな

丹生の島根に咲き亂れ

戀しき友とその下に

日の暮るゝをも知ざりき

春潮寄するいりうみの

磯邊につとふ魚あまた

終日釣をたれし日の

其樂しさの忘れぬ

大岩山に霞たち

いろまた淡き青野原

蕨を摘むもおもしろく

母に侍りしこともあり

楊柳風にうちなびき

眺めもわかぬ瀬川

ゆるき流に袖ひちて

鮎を捕へしこともあり

つゝじの花

吾妻

みどりまたゝる

樹々の露にも、

胸のおもひは

なほ消えやらで、

くれないもゆる

つゝじの花よ、

何をかふかく おもひなやめる。

熱きこゝろを さまさんどてか

池の汀に 影をひたせど

日の光さへ 照りそひぬれば

いよ／＼赤き 花のいろかな

別れし人を懐ひて 東くめ子

惜しみし春の くれ行けば、

庭の木蔭も くらきまで、

しけるわか葉と わかおもひ、

いつれかふかき くらべ見ん。

夕飯の時 みやこ

今日の業をば 成しをへて、

かへり来まし、 我せこと、

ひかふ夕飯の ひしろこそ、

嬉しきもの、 きわみなれ、

けふありしこと のたまへば、

われもきこえて かにかくに、

なぐさめられつ なぐさむる、

夕飯の時こそ 樂しけれ。

神樂 小林つね子

里のやしろに はより子の

かなづる袖の まひの手に

神代のむかし しのばれて

かぐらのわざの たふとしや

夢に亡友を見て 鞆 水生

ひすびてしもの契りのふかければ

夢路にひとの通ひきぬらん。

春の夜亡友を思ふ ひさ子

鳥羽玉のよはのあらしにさくら花

ちりてかへらぬ君をしを思ふ

糸櫻の風にそよげるを見て 同 人

ふくとなき風さへそれとしられけり

したりさくらの糸みたれつゝ

春夜江戸川に逍遙して 同 人

なかれ江のながれもあへず春の夜の

かけおほろにもよせむ月かな

櫻の雪あられとちる夕 同 人

ちる花をおしむにさそふ春風は

我庭のみとかこたれにけり

一日田端あたりを散歩して 同 人

せきわくる苗代水を見てそしる

けにいそがしきしづが世渡り

途上所見 なにかし

花さける垣根つたひにとふ蝶を

手にもとらんと追ふわらはかな

とふ蝶の翅みだれて春風に

鈴菜すゝしろ花ちりにけり

魚をうる翁もかごをおろしおきて

花の木かけに花を見るかな

鎌倉山にて 胡蝶

武士の血しほそゝぎし此岡に

いろもゆかしき董さきけり

向島にて雨にあひて 同 人

同しくば身をばぬらさん櫻木の

花下かけに雨やせりして

苑

文

庭の山吹

同人

七重八重と云ひし昔はしのばる、

雨はそはてる庭の山吹



研究

臺灣の昔話

町田則文

第四 神、佛、仙人及び妖怪に關する談話

一、盜賊に殺されし亡魂の物語をせし話。

二、明の冷子冰といふ人、學を好み、一試に應じて上進し、後仙法を學び、百年にして若びざりしと云ふ話。

三、李悛といふもの、初め貧にして、乞食なりしが、後福徳神の掌どる山中の銀を授かり、大富となりしといふ話。

四、哪吒太子といふ神は小兒を守護するといふ話。

五、丁七娘といへる女あり、繼母の惡む所となり、日々山に入りて、薪を採らしめらる、此山に薪なくして、猛虎多かりければ、九天玄女といふ仙女之を救ひ、鳳凰山金剛洞といふに入り、仙術を學ばしめしが、後繼母は惡疫にかゝりて死せしといふ話。

六、一古寺中雄雞死後人に生れしといふ話。

七、人身牛面の妖怪ありしといふ話。

八、人身牛面の妖怪あり人を食ひしといふ話。

九、馬槽の妖怪あり、口炎を吐き、手に一刀を揮ひしといふ話。

右の談話は人類學上人類の思想を判定するの資料

としては、之を細論するの必要なかるべし。中に

つぎ教訓的の意味を含むの多少を比較すれば左の

如し。

教訓的の意味を含める話

九分一

純粹なる神話怪談

九分八